

## ワークショップ「機能性消化管障害に対する創薬・新薬」

- 司会 三輪洋人（兵庫医科大学内科学消化管科）  
奥村利勝（旭川医科大学内科学講座  
消化器・血液腫瘍制御内科学分野）
- コメンテーター 屋嘉比康治（埼玉医科大学総合医療センター消化器・肝臓内科）  
富永和作（大阪医科大学先端医療開発学講座）

### 【司会の言葉】

機能性消化管疾患は、器質的な疾患がないにもかかわらず、腹部症状が慢性的に持続する疾患群である。その成因は複雑で、社会的なストレスの多様化、また増加とともにこれらの疾患も増加をたどっており、良性疾患にもかかわらず、生活の質を大きく低下させる原因となっている。しかし、発症機序に関してはいまだ不明な点も多く、心理的ストレスを背景とした脳腸相関、消化管知覚過敏、消化管運動性の変化などが注目されている。2014年に診療ガイドラインも刊行され、その治療指針も示されているが、治療に対しての患者の満足度はまだ十分とは言えない現状である。また疾患の特性として、治療薬とプラセボの有効率の差も出にくいため新規の治療薬の開発が困難であったが、本邦でもここ数年で、FDやIBSに対する新規の治療薬が発売され、新薬とともに既存薬のエビデンスが相次いで報告されるようになった。また国外においては新たなIBSの薬剤が登場し、活気づいている領域である。本ワークショップでは、既存薬での蓄積されたエビデンスをベースに新薬での臨床データや新規薬剤創薬に向けての問題点等を考えたい。